

ミステリ読書案内

2021. 11. 24 発行元

第298号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

山口雅也の初期代表作

『新本格』の誕生と結びつけて島田荘司、綾辻行人、折原一と連続して取り上げてきた。今回は山口雅也。同じ「本格」とは言いながら、独自の世界を作り上げ、その中での組み立てを得意としてきた作家である。

『生ける屍の死』でスタート

島田荘司の『占星術殺人事件』が1981年。綾辻行人の『十角館の殺人』が1987年。折原一の『五つの棺』が1988年。そして今回取り上げる山口雅也のデビュー作『生ける屍の死』が1989年。ここが「新本格」の誕生であり、日本ミステリの大きなエポックとなった時期でもある。

山口雅也は『生ける屍の死』以前にゲームブックとしての『13人目の探偵士』を書いており、それが出版社の目にとまったらしい。『生ける屍の死』は『このミス』ランキン

グの8位どまりだったが、それから時間の経過とともに評価が上がり続け、『このミス』10年20年30年と「ベスト10」作品に選出されるようになった。世の中が変わったと言うか、読者の意識が変わったというか…。不思議な気がする。

山口雅也は作品数は多くない。ここに掲げた「初期代表作」を出発点にして少し読み進めば、全体像を把握できると思う。若い読者の皆さんも、少しミステリを読み慣れた頃に山口ミステリに触れてもらえば有難い。現在の青崎有吾や今村昌弘などの作品に通じるものを発見できるはずだから。

No. 3 「キッド・ピストルズの冒瀆」

1991年東京創元社ハードカバー本。第二作に当たる。20世紀末の平行英国が舞台。シャーロック・ホームズの誕生した国で「探偵士」という仕事生まれた。主役のキッド・ピストルズとピンク・ベラドンナの二人はバンクス出身の捜査官として重要な役目を果たすようになってきていた。奇抜なパンク・ファッションで登場してくる。

シリーズの一冊目に当たるこの『冒瀆』には『「むしゃむしゃ、ごくごく」殺人事件』『カバは忘れない』『曲がった犯罪』『パンキー・レゲエ殺人』の4篇が収録されている。特異な設定の話だが、ミステリ・ランキングでは高く評価されている。『13人目の探偵士』『妄想』『慢心』…と続いていく。

No. 1 「生ける屍の死」

1989年東京創元社。『鮎川哲也と十三の謎』シリーズの第11回配本に当たる。私の手元にあるのはこれ。初版で美品なのだが、カバー上端の赤色がかすかに色褪せてきたかなという雰囲気。鮎川哲也の「序」と「解説」がついている。現在は創元推理文庫に収められている。

山口雅也のミステリ作品の一冊目になる。作者自身が「いままで誰も書かなかったようなミステリーを書いてみたい」と宣言したように、特異な内容の作品である。今でこそSFまがいの異世界を題材にしたミステリはあちこちに存在するが、当時としては斬新な設定だったということ。なにしろ「死者が甦る」世界なのだ。死者が生き返ってしまえば「犯人探し」は必要なくなってしまう。ミステリの大原則に合わないことになる。そんな不思議な世界の中で起こる、ブラック・ユーモアに満ちた物語。

「スマイリー霊園」を経営するバーリイコーン一家を巡る殺人事件。スマイリーの孫にあたり、パンク探偵役も務めるグリーン(フランシス)がピンク色の霊柩車に乗って霊園のあるトゥームズヴィルに帰る場面から始まる。そこで、死んで柩に入れられたのに生き返った何人かの人達の話が登場してくる。そして事件が起こり…、途中で探偵役のグリーンは自分自身が死んでいることに気付く仕掛けになってくる…。その結末は…。

No. 2 「ミステリーズ」

1994年講談社。『このミステリーがすごい!』年間ランキング第一位に輝いた出来栄え保証付きの本。各雑誌等に掲載された短編9篇を集めて収録した短編集だが、1997年に講談社ノベルスの形になった時に更に1篇が加えられて合計10篇になった。内容的にはかなりバラエティに富んでいる。まさに『ミステリーズ』の題名ぴったりで、ミステリのいろんな断面をいろんな角度から見せてくれる。DISK1・2と表現されているが、レコード(う〜ん、今では昔の表現なってしまったか)の表面裏面(A面B面)のように各短編をどんな順に提示していくかまでも考えた上での凝った構成になっている。

第一話の『密室症候群』は『ハヤカワ・ミステリ・マガジン』のディクソン・カー特集に合わせて書いた一編で、作者本人が言うには、パロディでもなく贋作でもなく、密室を別の角度から書きたかったとのこと。その意味では、マニア向けの作品が並んでいるとも言える。ある程度ミステリを読みこなしたからこそ見えてくる面白さみたいなものを上手に小説の形に仕上げて目の前に提示してくれているのである。